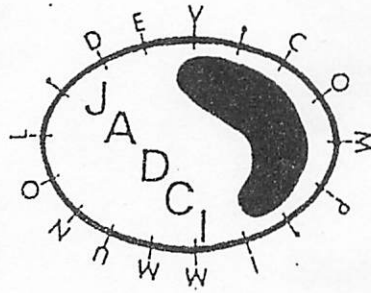


# J A D C I News

NO. 3

1990. 12. 20



The Japanese Association  
for Developmental and  
Comparative Immunology

Office: Department of Anatomy, Dokkyo  
University School of Medicine, Mibu,  
Tochigi 321-02

## あこがれの日本比較免疫学会

和氣 朗（日本大学農獣医学部応用生物科学科）

私が本学会の前身である比較免疫学研究会に入会したきっかけは、1976年に東京図書から“ヒトと微生物のたたかい”という本を出版したことにあったように記憶する。執筆をはじめたころは48才位で、免疫学がいまや成熟しかかろうとする頃であった。私はその進歩に取り残されまいと焦っていたが、一方このように華麗な科学体系が少数の専門用語をしか使用しない少数の人々の専有物であることにおこがましくも不満であった。そこで現在考えれば冒険である本書の執筆にとりかかったのであるが、出版後何人かの愛読者があったことを聞いて満足し、なかでも一中学生が15才の若さで全文を読み、感想文を出版社によこしたと聞いた時は嬉しかった。もっとも都立衛生研究所長や帝京大学教授を歴られた善養寺浩先生が“あまりものを知りすぎない方がよい本が書けるネ”と言われてニヤリとされた時には恥かしかったが。その本の目次に“生物膜・細胞壁・細胞膜”、“分類学と進化論”、“免疫の仕組み”、“仲間えらびの術の進化”等々と有るのを読めば、本書が比較免疫学的見地から書かれていたこともお察し願えよう。失礼ながらどなたか忘れたが比較免疫学研究会入会書を送って下さったのである。

これは比較生態学の分野に属する話かも知れないが、少年期ヒトはグループをつくって喧嘩をしながら成長する（少なくとも私の時代はそうであった。）。しかし私の両親の家が隣町に移転したために私は孤独な少年となり、私は昆虫や両生類と親しんだ。“大きくなったら動物園長になりたい”と言うと、なぜか母は悲しんだ。（ちなみに母は存命し89才にもなるが、私には生存競争に強いものが勝つんだからねと教育したものである。）これは私だけの経験で専門の動物学者に真偽を聞きたいのだが、日陰の池でトノサマガエルを卵から育てたことがある。卵はふ化しオタマジャクシは元気に泳いだけどどうしたことか秋になってもカエルにならなかった。それやこれやで比較生物学に対する興味は持続され、ヘッケルも原書で読んだ。

しかしいわゆる“食べる職業”という流れにまきこまれて医者になったが、それも中途半端で細菌感染と免疫学の方向にすすみ、マウスとエルシニア属細菌の相互作用に視野を狭めてしまった。60才定年というわけでこれまでの研究にケリをつけざるを得なくなった。そこに飛び込んで来たのが応用生物科学科動物細胞学教授という席である。とたんに比較免疫学も細胞培養も、サイトカインも、老化もと視野が広まって、移り気を楽しんで(?)いる段階である。水産関係の人は魚は老化しないという

が本当であろうか？系統間の壁をとりはらってバイオテクノロジーを適用したら免疫機構はどうなるだろうか？しかし何しろ新設学科である。私の助手を一人準備しておけといわれている。25才から33才位まで、学位保有者が望ましい。若い人の初任給は19万5千円であるという話を聞いた。とりとめもなく書いた本文が何かの縁になると嬉しい。

## 雑感

友永 進 (山口大学医療短期大学部)

1989年11月に第一回学術集会と総会をもった日本比較免疫学研究会は、今年8月に開催された第二回目の総会において、研究会から学会にその名称を変えることが決定された。1976年に発足し、12回の開催の歴史を持つ比較免疫学シンポジウム(日本動物学界のサテライトシンポジウム)の発展的解消によって誕生した研究会の発会準備に関係した一人として、今回の学会への名称の変更をことのほか嬉しく思う。本来名称なぞどうでもよいことであろう。私が嬉しいのは、研究会と言うより学会に値する内容の学術集会が出来るようになったということに対してである。

第一回学術集会の研究発表の英文抄録はDevelopmental and Comparative Immunology(DCI; Pergamon Press)に印刷された。印刷原稿は、私の研究室に備えているIBMのパソコンを駆使して作成した。英文抄録の印刷については、編集長(E. L. Cooper)も出版社も現在の所とても好意的である。第二回以降の抄録も継続してDCIに投稿し、JADCI会員の皆さんの研究を広く世界に知らせたいと考えている。

第一、第二回の学術集会の成功はまず第一に会員の皆さんがこの会の発足、さらにその発展を願って参加されたことによると言えよう。次いで、会を率いる村松繁会長の人徳と適確な判断力に加えて、具体的な準備などを献身的に取り組まれている古田恵美子庶務・会計役員を中心とした関東地区の先生方のご苦勞があることを忘れてはならない。古田先生の会計手腕のおかげで、東京ガーデンパレスでの懇親会では安い会費で御馳走がいただけるのも楽しみの一つである。

現在の会員は理学、医学、薬学、農学、水産学など様々な機関に所属されている研究者からなることも本学会の特徴である。学際的組織らしく研究分野・研究内容も多彩である。中でも、無脊椎動物の生理活性分子、抗菌物質、抗腫瘍物質、レクチンなど興味深い課題が我々を飽きさせない。それらの研究は純粋な学問として重要であるのみでなく、産業や臨床医学への応用の可能性を持つものとして注目されよう。また、下等な脊椎動物の免疫機構やMHCを始めとする免疫学的認識分子の進化に関する研究は、水産国日本のしっかりした基礎科学に基づく産業の発展のためにも、またほ乳動物の持つ免疫学的認識分子とその作用機構の深い理解のためにも、重要な研究課題として注目される。

JADCIの事業の一つは国際比較免疫学会(ISDCI)との交流、アジア・オセアニア地区研究者との交流である(会則III事業4、5)。第二回学術集会の案内

は第一回の案内の時と同様に国際比較免疫学会の役員諸氏とアジアの研究者にも送った。その結果、今回は韓国から張(Chang)先生が参加され会員にもなられた。将来もっと沢山の外国研究者の会員が増えることが期待される。そして、年一回の学術集會も東京ばかりでなく、ときにはソウル、ペキン・・・で開催することも夢ではなからう。ISDCIのRuben 会長から『1991年8月にオレゴン(USA)で開催される第5回ISDCIに日本から沢山の方が参加されることを期待している』旨の手紙を再三いただいていることを紹介しておきたい。第6回ISDCI(1994年)を日本で開催したらと言う声も外国の研究者の中から聞かれる。第6回が適当であるか否かは別として、そう遠くない将来において日本で開催することを積極的に考えなくてはならないであろう。

学会としてjournalを出したらと言う声も聞いた。このことに関しては、DCI(Pergamon Press)をもっと活用することの重要性を強調したい。関連分野の研究がより活発になり、より多くの研究者が良い論文をDCIに投稿され、DCIが月刊誌になるまでに発展することを願っている。

## 日本比較免疫学研究会第2回総会議事録

日時：1990年8月27日

会場：エーザイホール5階

出席者：35名（欠席役員：野本亀久雄、栃内 新）

会長挨拶（村松 繁）

開会挨拶の後、議題の内容を簡単に説明し、書記として小林睦生を指名した。

### 報告事項

#### 1) 庶務報告（古田 恵美子）

1. 会長選挙について、1989年12月27日に4名の会員の立会人の協力を得て開票が行なわれた事、また新会長により各役員（任期:1990.4.1~1992.3.31）が委嘱され、それについてはJADCI News NO.1 に掲載されている旨の報告がなされた。
2. JADCI News NO.1 を1990年2月1日に発行し、全会員に発送した。
3. 1990年4月10日に第2回学術集会の案内を全会員に発送した。
4. 前年度の会計をまとめ、1990年4月に会計監査担当の渡辺 浩・栃内 新 両役員に監査いただき、会員に承認された。会計報告ならびに監査承認の署名は JADCI News NO.2に掲載されている。
5. 1990年5月末日プログラムの原案を作成した。
6. 1990年8月4日 JADCI News NO.2を発行し、本年新たに作られたポスターと第2回学術集会の講演要旨集を同封して全会員に発送した。また、JADCIのシンボルマークを作り、通信用の封筒をマーク入りで印刷した。
7. 1990年8月24日役員および関係の会員の協力により会場準備が行なわれた。

#### 2) 第1回学術集会の英文 Abstract について（友永 進）

1. 29編の Abstract を日本人の査読者とDevelopmental and Comparative Immunologyの編集者に校閲していただいた。査読をお願いした会員の方々にこの場を借りて感謝したい。
2. アジア・オセアニア地域の研究者とISDCI の役員に学術集会の案内を送付したところ、ISDCI の Dr. L.N. Ruben より挨拶状が届き、来年オレゴンで開

催される Vth ISDCI Congress に多数の日本人の出席を期待している旨書かれていた。

### 3) プログラムについて (和合 治久)

本年はワープロを使ってプログラムを作り、オフセット印刷を行なったので昨年と比べて印刷費をかなり軽減する事が出来た。

## 審議事項

### 1) 来年の会期について (古田 恵美子)

本年と同様、1991年8月27・28日としたい旨発議され承認された。  
(翌日、同時期開催の国際比較生理生化学会との兼合いで8月28・29日または8月28～30日に変更された)。

### 2) 学術集会の内容について (和合 治久)

現在の発表形式に加えて、シンポジウム、総説講演また特別講演などを行なうてはどうかとの発議がなされ、今後、関係の役員で継続して検討する事になった。

### 3) 研究会名を変更する件 (村松 繁)

現研究会を学会としたい旨の提案が役員よりなされ、満場一致で1990年8月27日をもって日本比較免疫学会と改称する事が承認された。なお、英  
文名は現在と同じ The Japanese Association for Developmental and  
Comparative Immunology (JADCI) とする事で承認された。

### 4) 賛助会員の資格について

一部の学会などでは、人数制限はあるが賛助会員となった企業からの演題発表を認めているが、本学会ではどのようなになっているのかとの質問があり、種々論議された。賛助会員については本学会の趣旨に賛同して御援助いただいているとの立場から、特に規定を設けなくても良いのではないかとの意見も出され、今後継続してこの問題を役員間で検討する事となった。

## 事務局から

平成2年もあと2週間を残すのみとなりました。比較免疫学研究会から『学会』へと名実共に発展した記念すべき年であったと考えます。会員数も増加し、学術集会は、今年第2回を数えましたが、演題数も次第に増加の傾向がみられました。

平成3年の学術集会は、8月28、29、30日と総会('90, 8, 27)で決定されましたが、たまたま『第3回国際比較生理生化学会議』が8月25～30日に日本で開かれ、invertebrate defense mechanisms のセッションで講演される方々(10名)に招待状を送りました所、12月12日現在7名の方々から参加希望のお返事をいただきました。事務局といたしましては、嬉しい悲鳴をあげている所でございます。

また、1991年はISDCI (International Society of Developmental and Comparative Immunology) の第5回国際会議がオレゴン (USA) のReed Collegeで開催されます。この会議に参加する方々の為に、JADCIでは演題の締切りを少し早めに致したいと考えております。何卒よろしくお願い申し上げます。

外国からの参加者名をご参考までに。

- Dr. T. M. Rizki (ミシガン大学)
- Dr. R. M. Rizki (ミシガン大学)
- Dr. T. P. Yoshino (ウィスコンシン・マディソン大学)
- Dr. E. Gateff (ヨハネス・グーテンベルグ大学)
- Dr. D. Hultmark (ストックホルム大学)
- Dr. E. L. Cooper (カリフォルニア大学)
- Dr. K. Söderhäll (ウプサラ大学)

### これからの予定

- 1月下旬：第3回学術集会のお知らせ(第1報)
- 3月下旬：第3回学術集会のお知らせ(第2報)
- 5月上旬：講演要旨締切り(出席、宿泊、昼食申込み)
- 5月下旬：プログラム委員会
- 6月下旬：プログラム(Proceedings) 発送